

悲しくも美しい実話 救済所に棲みついた、三本足の白狐

救済所のある広大な鴉根の山には狐や狸、兎などが多く棲んでいます。亀三郎は自慢の猟銃で鳥や動物を撃ち食料にしたり毛皮をとったりしていました。いつも粗末な食事の救済所。たまに食卓にのる鳥や動物の肉は凄いご馳走でした。また、毛皮も貴重な収入源でした。

ある日のこと、亀三郎は鴉根の山で猟をしていました。

「いた!狐だ!白い狐だ」。

ズドン!と猟銃が火を吹く。しかし狐は仕留められませんでした。

それから数日後のこと。救済所の敷地の中を三本足の白い狐が足を引ながら歩いています。子狐も連れていました。

「わしの撃った狐だ。足を引く姿をわしに見せに来たのだ…。人助けを一生の仕事にした自分が、何ということをしてしまったのだ…」。

亀三郎は自分自身を悲しみました。そして、その日を境に狩猟をきっぱりと止めたのです。

さらに亀三郎は京都の伏見稲荷に行き、二丁の猟銃を奉納。稲荷神社の祭神である『白菊大神』『福德稲荷大明神』の分霊を得て、鴉根救済所に『稲荷神社』を建立したのです。

お稲荷さんの^{ほこら}祠が建ち、鳥居が建ち、救済所の人や亀三郎が毎日参拝するようになったころ、三本足の白狐が祠の辺りに姿を見せるようになりました。

白狐は祠のすぐ下に穴を掘り、そこに親子で棲みついたのです。そして親子の白狐は救済所の運道場にも姿をみせるなど、すっかり救済所の仲間となりました。

以来、白狐は救済所のアイドルとなり、稲荷神社は救済所の守り神になったのであります。

このお話は長く語り継がれたのです。



鴉根の丘に住んでいた新美南吉は「三本足の白狐の伝承」を知っていたのでしょう。そして名作『狐』のモチーフとなります。
提供/新美南吉記念館



白狐の陶像
常滑焼で制作。救済所跡に展示



狐の親子の棲んでいた場所。青いスタレの奥に棲み処の穴がある。棲み処の上部に稲荷の祠がある。



毘沙門天王拝殿の部屋から稲荷の祠が望めて、祭壇も設えてあった。



毘沙門天王拝殿全景